

南方（その他）

労苦体験記

京都府 矢野 美三雄

一、出生から兵役

― 出生から兵役までの生活状況 ―

大正五年九月二十日京都府加佐郡倉梯村堂奥一〇四五（現舞鶴市堂奥町一〇四五番地）に祖父母、父母、兄二人、姉二人、妹一人と私の十人家族に生まれた。

家業としては農業を主としていたが、父は村役場の収入役として勤務、田畑約二町歩と山林、藪あり、しかも農家の三男坊として、すこぶるのん気に大きくなつた。

昭和十年府立中学校を卒業したが成績も芳しくなく、勉強も好まず、しかたなく軍部万能時代の波に乗り、軍港都、舞鶴の艦船兵器製造の海軍工廠会計部に就職した。

日給一円三十銭と超過勤務により二分の増収。大体二十七日勤務し、月平均約四十二円余と年賞与一回。勤務年数によつたが私の場合は十五日分くらいであつたと記憶している。戦局の推移に伴い、おいおいハードな勤務となつた。

〔兵役〕

昭和十一年徴兵検査を受けたが体重が合格の基準より不足したため丙種第二国民兵役に編入された。

中学校にて配属将校による教練検定に、昭和十年合格していたが、ついに、その資格を生かすことなく終

わった。

国家総動員法による自家徴用工員として海軍工廠の一員となり技術報國の一翼を担った。

〔兵役と家族〕

自宅より自転車で約一時間を要して通勤した。父母兄弟共に健在で、生計は何ら自分には関係なし。

国策に沿い貯金国債購入に給料を当てた。

〔外地派遣〕

工廠の上司である会計部部員主計少佐にすすめられて、六年余り勤めた工廠に昭和十七年二月十一日別れを告げ、二十有七年住みなれた故郷を後にして工廠より転雇の同僚四人と共にジャバ占領後に設立される第百二海軍経理部（昭和十七年二月上旬海軍省分室に準備室開設）の雇員筆生として呉軍需部内設立事務所へ二月十二日出頭した。

工廠より外地派遣は開戦後日も浅かったので、出発に際しては会計部長主計大佐の案内で工廠長少将閣下に挨拶に参上し、工廠の名誉を汚さず軍務精励せよと励まされた。

二十五日呉を徴備船「東京丸（六四七トン）」に経理部軍需部工作部病院の数百名が乗船、出港した。下士官兵と判任官以下の軍属は船倉の居住区で暑苦しかった。

途中三月四日、ミンダナオ島ダバオに上陸、先遣第百一経理部の歓待を受け、十二日出港。緒戦の勝ち戦とはいえ残敵、未だ太平洋にうようよしていて軍船の行動は心細い。

浮遊するビール箱を潜望鏡と誤認して大騒動をしたこと、再三偽装の木製大砲を備えて指揮官退役の老佐、准士官一名、下士官兵十名ぐらいで、これまた頼りないことであった。

当時はスラバヤ沖海戦最中で十五日、百二経マカッサル支部に仮入部待機し、二十五日「興安丸」に乗り換え最終任地向け出港する。「東京丸」同乗の各部分はスラバヤへ直行した。

任地に二十七日到着、二十八日経理部バリックパパン支部の看板をかかげた。思えば呉出港以来、正に一カ月、魔の海バシー海峡を突破し、酷暑の赤道直下で

潜水艦をさけて「之」字航海を行い、敵機の襲撃ならんことを祈りつつ、はがゆい航程でたどり着いたのである。

派遣地における編制は呉海軍鎮守府所管第二南遣艦隊所属の特設海軍経理部で、第二百二海軍経理部長海軍主計大佐は第二南遣艦隊主計長を兼務し、旧蘭領東印度に所在する艦船部隊、各庁の予算決算執行と、検査を行う会計の元締で、本部スラバヤ支部バリクパパン、マカッサルに設置された。

私は古参雇員につき書記任官手続を再三本省に具申されたが、多くの艦船覆没、航空機撃墜されその機を逸し、最後は第二南遣艦隊司令長官の委嘱による海軍部内限判任官待遇嘱託として海軍の勤めの幕を閉じた。

二・軍務戦闘

身分は軍属で、軍人ではなくても海軍刑法や海軍処罰令の適用を受け、軍人に準じ時には海軍部隊として階級による命令は厳として存在し、経理部支部長部員（主計科士官）、主計科下士官兵以上、軍人判任文官、

雇員委任官嘱託、判任官嘱託以上軍属総勢約四十名であった。

軍人や文官には階級や先任順ははっきり決まり問題なし。私等雇員の中でも海軍各庁よりの転雇者は優遇され、庁内の中枢的立場にあつて部外よりの採用者を指導した。

雇員は陸軍徴兵検査や病気や希望により内地送還があつた。

なお、雇員の中には南進女性五人ほどいた。

嘱託者は現地商社マンが嘱託されたもので学歴経歴により委任判任の区別があつた。

一官の設営した官舎に分宿し雇員の製糧士の調理により食事が供せられ、現住民の下男下女を使い日常生活の所用をなさしめていた。

〔軍務戦闘の中の体験〕

任地に上陸したとき、即ち昭和十七年三月二十七日ころは、バリクパパンは日本軍の攻撃にて市街は大部分焼失し、電灯、水道皆使えず、最初はろうそくに照明をとり勤務した。

占領直後は日本銀行はなく、そのために経理部が何万という軍票ギルター券を保管し、当直室金網の中で冷たい軍票と同居し、暑い南洋の夜を約半年送った。南方につき台湾銀行が進出して来た日銀代行の南方開発金庫の業務を行うようになり軍票も本職に移管した。

昭和十八年八月十三日深夜B 24数機来襲して、この世に生を受けて二十七年間それこそ初体験で肝を冷した。

友軍より打ち出す高射砲はあたかも両国の花火のようで杜観の一語につきたが、盲蛇におちずで砲弾の破片落下で死傷するから絶対に壕へ入れと後刻致命があった。

それ以後空襲の主なもの、九月三十日B 24七二機、十月三日B 24数機、十月十日B 24百七機・P 38 一機・B 47 一六機、十四日B 24九八機、昭和十九年に入ると、連日連夜定期便となった。私は詳細に書き留めていたが、引揚げの際検査で書類を持ち帰ると戦犯にするとおどかさされ、貴重な文献も放棄したが、今にして

思えば残念の極みである。

南ボルネオは陸海軍協定により海軍担当地域につき、第二南遣艦隊麾下の第二十二特別根拠地隊司令官の中將か少將が最高指揮官で、時には敵艦隊来攻の情報で警戒配備の命も出て戦場感も増し、当初の樂園が地獄に近づいた。

本務の事務も帳簿を鞆へ入れて防空壕へ入ったり出たりで、命を守るために苦力くろりを駆使し壕づくりもした。

昭和十九年九月三十日女性理事生も病院船「氷川丸（一一六二二トン）に便乗し引き揚げることとなり、職場に咲いた五輪の花ももぎとられ後は殺風景な男だけの世界となった。

昭和十八年ころより開戦当初と異なり、攻守立場をかえてきた当時は、連合軍に制空権・制海権を完全に奪われた。

石油資源に乏しい日本では油の一滴は血の一滴と大事にされていた油都バrik パンも空しく宝の山となつて手が届かなかつた。軍艦の給油も空襲の合間に陸岸横着けですという哀れさであった。それでもここ

は油の都、原動力の地、今に連合艦隊の救援がと深い望みを抱いていた。

昭和二十年六月十五日、濠軍第七師団が軍艦三十隻で来攻してきた。艦砲射撃の威力ものすごく、ずしんと腹にこたえ恐ろしかった。

七月一日、敵約三万上陸したが、非戦闘員の經理部は最高指揮官より発せられた「千早二号作戦」で引き下がり戦法であった。ボルネオの大河マハカム河の流域を奥地へと転進した。

經理部の勤務員も、二十年四月陸軍晩部隊に召集令状なしに召集されたが、実際の身分給与勤務は従来どおりで、陸軍下士官や兵が海軍經理部内に勤務し、妙なものであった。

經理部も主計隊に編入され炊爨を主任務としたが、その炊煙を目標にされ多くの戦友が散華した。

運命は正に奇にして妙なり、内地に愛する妻やいとし子を遺し、戦陣にたおれ、身の軽い独身の私が命永らえるのも戦という悲惨事のなせる性、致し方なし。

衣食などが欠乏した中で、特に飢餓状態をどのよう

に凌ぎ、生命を永らえたか、またそういう状況下で軍務、戦闘能力の保持遂行及び部隊編成、指揮命令系統は確立されていたか。

敵上陸まではなんとか空襲の合間に食事も休養もしていたが、転進に移ってからは施設隊が先行して設営した小屋で雨露をしのぎ、主計隊が食糧補給所を設けていた。しかし、敵の追及は激しくなり食糧をすてて命からがら逃げるのが精一杯であった。知己の都山流の名手の一下士官が病魔で路上に倒れているのも見捨てて下がった。今思えば、せめて一滴の水でも飲ませておいたらと気の毒に思っている。

戦闘中の私の主任務は、敗色で価値なくなった反故のような軍票運搬で、苦力に担がせ山中をさまよった。

無軍令権の主計少佐が変則の野戦大隊長になったが、この方は原住民虐殺で死刑となる。なお主計科下級士官養成のため二年現役制度があったが、長年海軍の飯を食ってきた下士官の中には、職業軍人の經理学校出士官に心から服従していたが、二年現役に対しては抗命の罪の場面が再三あった。

軍務戦闘下において病氣・けがその他の災難からどのように身を守ったか。また不幸にして病氣やけがを負ったときの手当はどうであったか（野戦病院等）。

来攻前までは根拠地隊や燃料廠の病舎が充実し、私も酷熱の地のなれぬ勤務や家郷を離れたさびしさやストレス蓄積で、左胸膜炎にかかるも早期治療と手厚い看護で全快し幸いであった。敵が上陸し交戦状態に入ってからには戦死・戦傷病者続出し、麻酔なしで手術が行われたり医薬品の不足で中々手が回らなかったようであった。

私は空襲をさけての林間生活多く、日照時間中の行動が少なかったため下痢症状を来し、ついにアメーバ赤痢になったかと、心配になった。同行の衛生大尉に実状をいい指導を受けたが、努めて日光に当たり体を温めよ、とのこととおりにしたら数日で回復した。

山道で足がだるく脚気になったと早合点したが、野草で灸せよと教えられ良くなった。

―病氣やけがと原隊復帰は円滑にいったか、完全治療しないでの復帰はなかったか―

海軍の役所にも任務や事務の分担があり余分の人間は配置されていないから病氣になると他の者がカバーしてくれる。が迷惑になるのはもちろんであるし、私の胸膜炎の場合は完全治療までいなくても宿舎内の病室にて養生し症状により軽業として執務した。

そして昭和十七年四月に侍従武官御差遣の際に、病舎空室多いため軽傷でも入院させられ、病舎の体面を保たれたのであった。

三、終戦

―いつどこでどういう形で終戦を知ったか、そのときどういう状況下に置かれていたか―

終戦は八月十七日サマリンドン山中で主計隊長の詔書捧読にて知るが、敗戦は米国二世の二年現役士官の話や敵側放送にて予期していた。

―いつどこでこの国の軍隊に武装解除され又は投

降したか、それは円滑に行われたか。逃亡者、自決者などはいなかったか――

八月二十五日海軍最高指揮官が参謀帯同でバリツクパバンの豪州（現オーストラリア）軍艦上にて降伏調印し、同国第十七師団に武装解除された。日本軍は小銃の菊の御紋章を鑓やすりで削り落とした。

私は携帯していた昭和新刀一本と海軍礼装刀一振をマハカムの大河に投じた。投降、武装解除共に無事に行われた。経理部勤務者の中の病弱者に一人自殺者があった。

――捕虜体験がある場合はどこでいつからいつまで収容され、どういう生活であったか――

捕虜とは哀れの一語につきる。昭和二十年八月二十五日より翌年六月五日までの抑留中、最初は豪軍に管理され、二十一年二月よりは蘭軍に移管され、サマリ نداで少量の食糧で露命をつなぎ、野草を摘みカルシウム源に海老をとり、現住民の情で果物を手に入れ、炭坑復旧の苦役に酷使された。特務士官が蘭軍の兵に欠礼し銃殺され、戦犯容疑者発見のため一列に並ばさ

れた首実験を受け、薄氷を踏む気がした。

四、復員後の生活と家族

――いつどこからどういう経路でどこの船（国名船名船種）で内地のどこにいつ復員したか、などの状況――

戦犯容疑者約三百名を残し、昭和二十一年五月二十日ボルネオサマリ نداからマハカム河を機帆船に便乗し、パルクパバンにてアメリカのリバティ型「ピーターバナム号」上陸船にて、二十一年五月三十一日名古屋港へ復員した。

復員船中で燃料廠会計部工員が、戦中上司である会計部長主計大佐輸送指揮官に酷使され、ひどい目にあった報復として、皆の前で土下座し謝罪せよと要求し大事になりそうであった。船長が船中の警察権は、船長にあり従わぬ者があれば近くの連合軍の基地へ引き渡す、との説諭で治まった一幕もあった。

――復員後どこに住居を定めたか――

出身地の舞鶴へ帰還し親の膝下に入った。

―復員当時の家族の安否と生活状況―

復員し家に着く前に、甥より実母が昭和十九年九月三十日に死亡したことを聞かされ、慈母を失った悲しみ一入であった。思えばその日は私の大空襲受難の日で、最後かと思つた厄日であったが、母が身代わりになつたのだと思ひ諦めた。農家のこと故、戦後も食糧難はなし、一応生活は安定であつた。

復員後は職探しに奔走したが刑務所看守のみ募集あり、性に合わぬと思ひ兄の世話で特定郵便局に就職した。特定郵便局も改善され国家公務員の身分となり、生活の基盤である職務に精励し、三十一年間勤めた。その間数回各種表彰を受けた。現役終了後、市役所の当直員を約十二年間勤めた。

結婚後、家族の病気や台風の被害にもあつたが、住宅も新築し子や孫も生まれ平和である。

終戦そして

飢餓のレンパン島へ

―第三気象連隊―

愛知県 森 由治

―シンガポール脱出―

昭和二十年八月十五日、玉音放送は、非番の者が全員整列して、シンガポールの連隊本部で拝聴したが、混信が多くほとんど聞き取れなかつた。しかし、部隊の特性から極秘情報や、カルカッタ放送などを密かに受信している者があり、それらの話も聞いていたので、直ちに日本の敗戦は了解できた。

部隊は終戦の事務処理に移り、昨日までは戦闘訓練・防空壕掘りなどの幹部候補生としての教育訓練に明け暮れていた私たちも、書類や不用品の焼却を行った。八月二十三日、連隊本部・本部勤務隊・材料廠の約四百人は、残留申し送り要員（約四〇名）この残留要